

伊勢伝考

——晩年の伊勢——

春霞立つを見捨てて行く雁は花なき里に住みやなら

へる

伊勢

藤の花咲くを見捨てて行く春はうしろめたくや思は

ざるらむ

中務

4 晩年の伊勢とその作歌活動

晩年の伊勢は、親王の忘れ形見中務をその心のささえとして、かつての華やかな夢を追いつつ残された生涯を比較的平穩に送つたもののようである。親王の薨じた延長八年(九三〇)、中務は前稿^①の推定に立てばほぼ十七・八歳に達していた事になる。彼女もまた母と同じようにそのむすめ時代を若い皇子達に囲まれていた。「後撰集

雑一」に、

岡崎知子

元長親王のすみ侍りける時、手まさぐりに、何入
れて侍りける箱にかありけむしたおびして結ひ
て、又来む時に開けむとて、物のかみにさし置き
て出で侍りける後、常明親王取隠されて月日久し
く侍りてありし。家にかへりてこの箱を元長親王
に送るとて。

中務

あけてだに何にかはせむ水の江の浦島の子を思ひやり
つつ

と見える。これによると中務のもとに元長親王が通い住
んでおられたようである。元長親王は陽成天皇の第三皇
子で、かの「わびぬればいまはたおなじ難波なる……」^②
の歌をもつて知られている第一皇子元良親王の異母弟に
当られる。元良、元長両親王の名は混同しやすいが「後

撰集」「大和物語」等に逸話の多い元良親王は寛平二年

(八九〇)の生誕、中務と契つた元長親王は延喜元年(九

〇一)の生誕である。また常明親王は醍醐天皇の第五皇

子で、延喜六年(九〇六)の生誕である。また前稿におい

ても述べたように、「貫之集」「信明集」等によれば中

務ははじめ「敦慶式部卿親王の女」「敦慶のみこのむす

め」と呼ばれていた。このような点から推測すると、伊

勢、中務母娘が親王の歿後それほど急激に零落したとは

考えられない。成長した中務はやがて母に代つて宮仕え

に出たようである。中務についてはいづれ別稿において

述べるつもりであるからここに詳述をさけるが、ともか

く名だたる歌人伊勢のむすめとして、中務ははじめから

期待されていたのであつた。藤原公任の「新撰髓脳」に

難波なる長柄の橋も作るなり今は我が身を何にたとへ

む

という歌をあげて、「これは伊勢の御が、中務の君に、

かく詠むべしといひける歌なり。」と云つてゐる。その

事の真偽は別として、伊勢が中務に歌の手ほどきをした

であろう事は、たとえば冒頭に掲げた両者の歌を比べて

みても容易に想像がつく。はじめの頃は伊勢が代作もし

ている。「伊勢集」に、「むすめの男、絶えにければ、

代りて。」という詞書が見える。またこれも同集に、

親におくれたる頃、男のとぶらはぬに、

亡き人もある葛城を思ふにも色わかれぬは涙なりけり

とみえるものが、「信明集」に

同じ女(あつよしのみこのむすめ)服なる頃、絶えまがちなるを恨

みて

同 歌 (略)

となつてゐる。なお「中務集」によれば中務は琴に堪能

であつたらしい。これは父親王のすぐれた音楽的才能を

うけつたものと云えようが、同時に母伊勢の影響も多

分にあつたろうと思う(秦箏相承血脈参照)。中務は母の歿

後その家集をまとめ、村上天皇の御召によつて献上し、

あるいは人にも写し与えたりしている^⑧。このような事情

から考えると、晩年の伊勢にとつて中務は最も頼みとす

べき唯一の人間であつたように思われる。

敦慶親王との死別は伊勢にとつて確かに痛恨事であつ

たにちがいない。だがその後の伊勢はそれだからといつ

てそのまま逼塞してしまつたわけではない。彼女はまた

まだ息の長い作家であつた。われわれはもう一度、「伊

勢集」の上に彼女の其後の消息を追つてみる事にしよう。

親王の薨去の悲しみもまだ消えやらぬ翌承平元年(九

三二) 七月十九日、宇多法皇が仁和寺に崩ぜられた。直接に法皇の崩御を悼んだ伊勢の歌はみられないが、歌仙本「伊勢集」に次の歌がみられる。

みかどの御国忌に

花すすき呼子鳥にもあらねども昔恋しき音をのみぞ泣く

この「みかど」は伊勢にとつては「院のみかど」すなわち宇多院の事であろう。御遺勅により宇多院の国忌は置かれなかつたが、これは慣例により祥月御命日の事と考えてよからう。越えて翌承平二年(九三三)には敦慶親王の後見者であつた御伯父三条右大臣藤原定方が薨じている。こうして伊勢の周囲は次第に淋しくなつていつた。

「伊勢集」に

昔、ひとところなりし人の(後撰集の詞書によれば、同じ所に宮仕しける人、年ごろいかにぞ)と云ひたるに、

身は早く亡きもののごとなりにしを消えせぬものは心なりけり

百敷の花を折りても見てしがな昔を今に思ひくらべてとみえるのは、あるいは院におくれ奉つた頃の伊勢の心境を詠じたものではないかと思う。

承平三年(九三三)八月廿八日、醍醐天皇の特に鐘愛せられた北宮康子内親王(御母は皇后穩子。朱雀・村上兩帝の御姉。延喜十九年生誕)の御装着の儀が行なわれ、紀貫之、源公忠らと共に伊勢も御屏風の歌を召された。

北の宮の御装奉るに、大臣の御贈物の屏風の歌、水のつらに松ある所。

いにしへの心も絶えず行く水にわかまつかげも今日こそは見れ (他に四首を略す)

翌承平四年(九三四)には醍醐帝の皇后で、朱雀・村上兩帝の御生母であられる皇太后穩子の五十の御賀が行なわれた。三月廿六日の春の御賀は、当代朱雀天皇の御主催、十二月九日の冬の御賀は時の摂政左大臣藤原忠平が催した。伊勢はこの兩度の御賀の屏風歌を詠進している。

きさいの宮の五十賀、内にてせさせ給ひしに、御屏風の歌、祓へするところ。

みそぎつつ思ふことをぞ禱りつる八百万代の神のまにまに

是も後の宮の御賀、おほきおとどのつかうまつり給ひし御屏風の絵に、松に鶴立てるところ。

住の江の浜の真砂をふむ田鶴は久しき跡をとむるなるべし (他に一首を略す)

承平七年(九三七)十二月十七日、陽成上皇の御所冷泉院において、陽成院の皇子元良親王らによる陽成院七十の御賀が催された。当日の御贈物など善美を尽くし、伊勢は「打乱箱に鶴亀・菊など時きたる」ところに、露かかる菊の中なる葦田鶴は今幾度か千代数ふらんと詠んでいる。

ところで次の歌は少し注目しなければならない。

或る(大)^{中④}納言の、比叡坂本に音羽といふ山の麓にいとをかしき家造りたりけるに、音羽川を遣水に堰入れて滝など落したるを見て、遣水のつらなる石に書き付く。

音羽川堰き入れて落す滝つ瀬に人の心の見えもするか
な

この歌は「拾遺集^{雜上}」に、

権中納言敦忠が西坂本の山荘の滝の岩に書きつけ

侍りける。

伊 勢

歌、右に同じ。

中 務

君がくる宿に絶えせぬ滝の糸は経て見まほしきものに
ぞありける

とあつて、ここでわれわれははじめて母伊勢と肩を並べ

て歌を詠んでいる中務を見出だすことができる。これは老後の伊勢が中務を伴つて、比叡坂本の山麓(ちようど今の修学院離宮のあるあたりか)にある権中納言藤原敦忠の音羽山荘に一日の清遊を楽しんだ時のことであろう。敦忠は左大臣時平の三男で、世に賢人大将といわれた保忠の弟である。延長七年(九二九)、伊勢は当時左兵衛佐であつた敦忠が、兄八条大将保忠の四十の賀を行なうに際し、敦忠の依頼によりその屏風歌を詠じている。敦忠は「世にめでたき和歌の上手」といわれ、「管絃の道にもすぐれ」た人であつた。有名な博雅三位でさえも、彼の前には世のおぼえが劣るとさえいわれた程であつた(大鏡)。「今昔物語」や「大和物語」には敦忠に関する逸話が多くみられる。それはともかく、これは、晩年の伊勢と中務母子の生活をうかがわせる僅かな材料の一つである。ところでこの歌の製作年代であるが、敦忠はみづから「命短き族」と称していたが(大鏡)、天慶六年(九四三)三月七日、卅九歳をもつて薨じた。権中納言に任ぜられたのはその前年の天慶五年(九四二)三月であるから(公卿補任)、詞書が当時現在の官名を称したのであればそれは天慶五年中の事と考えられる。なおこの日は藤原朝忠も同席したらしく、「権中納言朝忠卿集」にも、

権中納言の音羽の家にて、

音羽川身をばたぎりて流るとも君が宿にはまさりしも
せじ

と見える。これら三首共に桜や紅葉が詠まれておらず、
また涼しいという意もないところからすると、おそらく
初夏の頃ではなかつたかと思う。もし、これが天慶五年
(九四二)の事であるとすれば、伊勢の晩年の足跡として
は最後のものとなる。

かくて伊勢の作歌活動は、公的には寛平四・五年(八
九二・三)の頃に行なわれた皇太夫人班子女王歌合(通称
寛平御時后宮歌合)から承平七年(九三七)の陽成院の七十
御賀の屏風歌詠進までの約四十五年間、私的にはおそら

く寛平の初年から天慶年間まで五十数年にわたるものと
考えられる。今それらの作歌活動の中から特に、歌合と
屏風歌とをえらび、これをほぼ年代順に整理してみると
まず歌合(物合を含む)は現在次のごときものが知られて
いる。

左のうち、1から4までは御息所時代およびそれ以前
に属するものであろう。5以降は敦慶親王家時代のもの
と云えるかと思う。中でも平安朝初期歌合史上最も重き
をなす「亭子院歌合」に、唯一人の女流として凡河内躬
恒、藤原興風、紀貫之、坂上是則らと肩を並べて詠出し
ている事は、当時の伊勢の実力の程を示すものである。

次に屏風歌は「伊勢集」を通じて約十九度、七〇首を

名 称	開 催 年 時	主 催 者	所見歌数
1 皇太夫人班子女王歌合	寛平5年9月以前	宇多院	1
2 東宮御息所小箱合	不 明	東宮御息所	1
3 亭子院女郎花合	昌泰元年秋	宇多院	1
4 宇多院物名歌合	不 明	宇多院	1
5 陽成院歌合	延喜12~13年夏	陽成院	2
6 亭子院歌合	延喜13年3月13日	宇多院	5
7 京極御息所雲子歌合	延喜21年	宇多院御息所藤原雲子	3
8 式部卿敦慶親王前歌合	延長2~7年秋	敦慶親王	3

* 歌合の名称及び開催年時は荻谷朴氏著「平安朝歌合大成」巻一による。

数える。そのうちの約半数は温子
宮仕時代から御息所時代にかけて
のもので、大部分温子や宇多院の
命をうけて詠進したものである。
しかしそれらはほとんど製作年代
が不明である。ところが敦慶親王
家時代以降に製作された屏風歌は
ほとんど年代が判明している。そ
れ故今はその製作年代の明らかな

詠進事由

年	時	依頼主	所見歌数
1	延喜13年10月	民部卿藤原清貴	12
2	(延喜15年2月か)	(斎院か)	2
3	延長4年9月	京極御息所襲子	3
4	延長7年	左兵衛佐藤原敦忠	4
5	承平3年8月	摂政左大臣藤原忠平	5
6	承平4年3月	朱雀帝	2
7	承平4年12月	摂政左大臣藤原忠平	2
8	承平7年12月	兵部卿宮元良親王	1

* 8は屏風歌ではないが便宜上、屏風歌に準ずるものとしてあげた。

もののみを挙げるにとどめる事にする。

かようにみる時、歌合は伊勢の若い頃から中年の頃にかけて多く、それ以後晩年にかけてはほとんどみられない。これにひきかえ屏風歌は若い頃にも長恨歌の御屏風などあるにはあるが、特に中年以降晩年にかけては外部からの依頼による屏風歌製作が目立つのである。要するに伊勢は、年代で云うと延喜十年台をさかいに歌合の歌人から屏風歌の歌人へと移行していったとみる事ができる。これは歌合と屏風歌との性格の相違にもよるが、ともかく伊勢は歌合の第一線を退いてもなおかつ専門歌人としての貫録と名声とを屏風歌の上に保持していたと云う事ができよう。

談^{十三、寺院}部^上「および「摂津名所図会^{五、嶋}」には、嶋上郡

古曾部村に象王山伊勢寺というのがあつて、世に伊勢終焉の地であると伝えている。すなわち伊勢寺は伊勢の御の旧跡を寺としたもので、伊勢は宇多院の崩後、ここに隠遁幽棲して終をとつたというのである。近世、林羅山はこの伝えによつて伊勢寺碑銘を書いている。^⑤また「花鳥余情^{四末}」には「帝王系図注云、宇多院山陵在大内山仁和寺西云々。故寛平法皇かくれ給ひて後、此所に伊勢が住みけるに、『ならびの岡の松風、すこし吹』と書けりしからは、大内山は並びの岡あたりなるべし。」とあつて、伊勢が法皇の崩後、その大内山陵に程近い並が岡のあたりに隠棲した事を伝えている。さらに「類聚名物

伊勢がその生涯をとじたのは前稿で述べたように天慶の末年頃かと思われるが、その終焉の地は、何処であつたのであろうか。おそらくそれは京都であり、むすめの許においてであつただろうが、面白い事には伊勢の終焉の地や伊勢の住処について古来いろいろな説が伝えられている。まず「摂陽群

考^{九三地理}には「伊勢御の家」として、「京都八幡山の

南に観音寺の旧跡あり。是は往時伊勢の御の在りし所と

ぞ。」と見える。この伝えは「撰集抄^八」の「伊勢歌之

事」に、伊勢が男山八幡宮の檢校の妻となり、数人の子

を産んだという荒唐な説話と関係がありそうである。ま

た「山城名勝志^{三洛}」によると、「伊勢御家」として「伊

勢御の家は二条南、東洞院東乎、後撰詞書に朝忠朝臣の

家の隣に侍けりと云々。按、朝忠は父の大西殿に住給へ

るにや、押小路南、高倉東なれば隣ともいふべきか。」

と見える。「後撰詞書に云々」は「後撰集^{泰下}」に

朝忠朝臣の家の隣に侍りけるに、桜のいたう散り

ければいひ遣はしける。

伊 勢

垣越に散り来る花を見るよりは根ごめに風の吹きもこ

さなむ

をさすものと思われるが、「後撰集^{秋下}」および「伊勢

集」によれば藤原雅正の家にも隣接しておつたようであ

り(後述)、いずれが真相を伝えるものであるか明らかで

ない。しかし伊勢が二条南、東洞院東のあたりに住んだ

らしい事は他に「山城名勝志^{師一之上京}」および「雍州府志

八古蹟門^{愛宕郡}」にもみえ、また下に述べるようにならぬ信用が

おけそうである。なお「雍州府志」は更に一説として、

高辻室町西、称須^{ネズ}茂知^{モチ}町をあげている。これは「伊勢集」

に、「此女の家は五条わたりなるに……」とあつて、仲

平がその伊勢の家に歌を贈り、伊勢はこれに對してねず

みもちの木につけて返歌をした事に因むものであらう。

このほか、「伊勢集」によると、桂にも家のあつた事が

知られる。伊勢は産み奉つた宇多院の皇子を桂の里で養

育し、宇多院も桂の伊勢のもとに、ひそかに御幸せられ

た事がある(伊勢集)。すなわち、「山城志^{郡四葛野}」に「桂

別墅^{見古今和歌集小序}桂上下二村、伊勢妃宅」と見える。

以上の諸説のうち、二条の東洞院に住んだ事は、早く

平安中期能因の頃より云われており、「俊頼口伝集^下」

や清輔の「袋草紙^{卷三}」には、能因が藤原兼房と共に車

で伊勢の家の前を通りかかつた時、能因は車から下りて

歩行し、かの家の松の梢が見えている間は車に乗らな

かつた話を伝えている。能因は古曾部から毎年春の桜の頃

上洛し、大江公資の五条の東洞院の家に滞在していたと

いうから(袋草紙)、東洞院の二条に、伊勢宅の旧跡があ

つた事を聞き伝えていたものであらう。要するに「伊勢

集」の詞書や、能因の話を信ずるかぎりにおいて伊勢は

五条附近、二条東洞院附近、桂等に住んでいた事は認め

ねばなるまい。ただその晩年の棲家がどこであつたかは

いずれとも断言しかねる。「伊勢集」に、

家を売りて

飛鳥川淵瀬にもあらぬわが宿もせにかはりゆくものに
ぞありける

「古今集雜下」これに同じ。

我家を人のになして花をやるとして

花の色の昔ながらに見えつれば人の宿とおもほえぬ
かな

「風雅集雜上」これに同じ。

前者が晩年の零落を伝える材料にはなり得ない事は既に
曾沢太吉氏も指摘されたところであるが、七十余年の生
涯の間には少くとも兩度、あるいはそれ以上の転宅はあ
つたものと見なければなるまい。ともかく名だたる伊勢
の住処は上述のごとくさまざまに語り伝えられているの
である。

5 伊勢をめぐる人々

伊勢をめぐる人々、言いかえるならば伊勢の交際範囲
にあつた人々について、特に「伊勢集」を通じて考えて
みたいと思う。

今「伊勢集」にあらわれる人々を便宜上次の三類にわ
かつて述べる事とする。

一、恋愛関係にあつたと思われる人。

藤原時平、同仲平、平定文、源敏相、凡河内躬恒
二、和歌あるいは音楽を通じて交渉をもつたと思われる
人。

四宮勤子内親王、藤原敦忠、藤原玄上妻、藤原朝忠、
藤原雅正、源宗子、藤原季繩、在原としはる

三、宮仕関係の知合いと思われる人。

一条の君、兵衛命婦、中宮内侍、中宮宣旨、遠江内侍、
堀河院土佐

以下この順によつて述べるが、まず一に属する人々のう
ち、藤原時平、同仲平については既に述べたので、ここ
ではそのほかの人々との関係について簡単に記そう。

平定文と伊勢

王孫右近中将平好風の一子である平中、すなわち平定
文と伊勢との間柄については、かの「平中物語」との間
連において興味深いものがある。周知のごとく「平中物
語」の第二段は「伊勢集」の定文と伊勢との贈答歌を骨
子として語られており、後には「本院侍従樋洗宮譚」の
いわゆる平中好色滑稽譚として類型的な説話を産む事にな
る。定文は「平中物語」の主人公として、その風流好
色の性格が戯画化されているけれども、實在の人物とし
ても萩谷朴氏の御研究^⑩により、かなり輪廓がはつきりし

た。従つて定文自身に關してはすべてそれにゆずる事として、ここでは「伊勢集」にあらわれた平中だけを取上げる。

同じ女(伊勢)、言ふともなく、言はずともなくよばふを、返り事もせざりければ、「こころの年月になりぬれど、などか見つとのたまはぬ。」と云へりければ唯、「見つ」とのみぞ云へりける。それより此女を「みつ」とぞ付けたりける。男(平中)のおこせたりける。

立歸りふみ行かざらば浜千鳥あとみつとだに君云はましや

返し

年経ぬること思はずは浜千鳥ふみとめてだに見べきものかは

夏のいと暑き日盛りに同じ人

夏の日の燃ゆる思ひの侘びしきに水恋鳥の音をのみぞ鳴く

返し

いたづらに溜る涙の水ならばこれして消てと言はましものを

かういふ人々の事をも聞かで宮仕をのみしける

に、時の帝召仕はせ給ひけり。中略此帝に仕うまつりて子産みたる人は、世に幸ひ無きものなりければ、産み奉りし君、八つに成り給ふ年亡せ給ひにければ、いみじう悲しと思ふにもおろかに覚ゆれば更に云ふ甲斐なし。死なんと思ふにも死なれず夜昼泣く程に「みつ」と付けたりし人の許より云ひおこせたりける。

思ふよりいふはおろかになりぬれば例へて云はん言の葉ぞなき

とあれば、更に物覚えで返り事もせず。

前四首の贈答の行なわれた時期について萩谷氏は定文の官歴其他から、大体寛平五年(八九三)から寛平七年(八九五)頃の事であろうと推定された^⑩。伊勢の伝の上からもやはりその頃であろうと思われる。ところで、ここにみられる伊勢の定文に対する態度はまことに冷淡で、時には揶揄的でさえある。「伊勢集」には他にも定文との贈答と知られるものがあるが、それらを見ても伊勢は定文に対してつれない態度で終始している。にもかかわらず定文の態度には常に純な、ひたすらなものが感じられる。後年伊勢が皇子を失つて悲歎にくれていた時、定文は心をこめて慰めの歌を贈つている(上掲「思ふより」)。

しかし伊勢はこれに対しても遂に返事をしなかつたのである。

源敏相と伊勢

平定文と交渉のあつた頃とほぼ同じ時期に、左兵衛佐源敏相も伊勢に思いを寄せたようである。しかし伊勢にとつては人数にも入らぬ相手であつた。

(添ひて)

また、人数ともせぬに、心ざしいと深き人そひて云ひける。文おこせけれど返り事もせざりければ山がつと云へどもかひぞなかりける山彦そらにわが答へせよ

なほ返り事もせざりければ、「否ともいかにともわが君、わが君とせむれば、

いなせとも云ひはなたれず憂きものは身を心ともせぬ世なりけり

かかるに、時の大臣流され給ふ。むごにて、兵衛佐より但馬介になされて流されけるを、「ただにてはさしも覚えでやみにしを、かく遠く流れ行きたるが哀れなる事」といひたりしかば、
かけて云へば涙の川の瀬を早み心づからやまたは流れん

昌泰四年(九〇二)正月廿五日、時の右大臣菅原道真が左

大臣時平の讒により太宰権師として左遷された時の事である。「政事要略」同年同月日の左降除目に道真とその関係者の左遷時の身分が記録されている中に、「但馬権守源敏相左兵衛佐」と見える。ここで初めて敏相は伊勢の同情を得たのであつた。ちなみに敏相は、醍醐天皇の更衣として仕え皇子允明(鳥羽院)を産み奉つた兵衛御息所の父である。思うに平定文や源敏相のごとき弱少貴族の子弟は伊勢の目ざすところではなかつた。時の関白太政大臣の若君達に争われ、はては時のみかどにさえも召された程の伊勢であつたからには、それも当然の事と云えよう。

凡河内躬恒と伊勢

「伊勢集」に

年経て物云ひわたる人の

頼めつつ逢はで年経るいつはりに懲りぬ心を人は知らなむ

返し

夏虫の知る知るまどふ思ひをば懲りぬかなしと誰か見ざらむ

という贈答がある。「頼めつつ」の歌は「古今集 恋二」に躬恒の作として出ており、また別に「夏虫の」の歌の

返しと思われる躬恒の歌もみられる。すなわち、

夏虫を何か云ひけむ心からわれも思ひに燃ゆるべらなり
 「古今集恋二」

これらによつて、躬恒と伊勢との交渉があつた事はみとめられよう。なおこの贈答は「後撰集 恋五」では在原業平と伊勢との間に交わされた事になつてゐる。「古今集 恋五」には他にももう一組伊勢と業平の贈答がみられるが、既に「袋草紙三」で清輔も指摘しているように、元慶四年(八八〇)五六歳で歿した業平が、その当時やつと六・七歳に達したばかりくらいの伊勢と交渉をもつてゐるのは不自然な話である。加うるに業平の伝説的色彩を考慮し、一方躬恒が「古今集」の撰者の一人である事を思うと、「頼めつつ」の作者はやはり、「古今集」の所伝のように躬恒とみるべきであらう。

次に第二類に属する人々について見よう。

四宮勤子内親王と伊勢

天慶元年(九三八)十一月五日、九条右大臣藤原師輔(当時権中納言)の北の方であられた醍醐天皇第四皇女勤子内親王(御年卅四)が薨ぜられた。伊勢はこれを弔問し奉つてゐる。集に、

女四宮へとぶらひ聞こゆとて、

こころ世を聞くが中にも悲しきは人の涙も果てやしぬらん

とてまいらせたるに、御返しもなければ、また、言だにも通ふ世ならば亡き人の涙の程も聞きはきなまし

なお西本願寺本「伊勢集」には「こころ世」をの歌の御返しとして、読人知らずの(おそらくは、四宮方か師輔方の女房か)

聞く人もあはれといふなるおもひにはいとど涙のつきずもあるかな
 「後撰集哀傷」ほほこれに同じ。

の歌がみえ、また、「言だにも」の御返しとして、行き通ふ道はなくとも死出の山ことのはをだにふきもこさなん

と見える。この哀悼歌だけでは伊勢と勤子内親王とがどのような関係にあつたものかわからないが、内親王が音楽的な天分にすぐれ、箏琴に堪能であられた事から考えて、やはりその方面での御ゆかりとみられよう。勤子内親王の御母は近江更衣源周子で、同じ一族の中の源順はこの内親王の命により「倭名類聚抄」を撰したが、其序文に「(先帝)特鐘愛焉、即賜御府箏、手教授其譜、公主天然聰高、学不再問、一二年間能究妙曲、十三絃上、更

奏新声、」と見える。

藤原敦忠と伊勢

権中納言敦忠については、既に前項において触れたが、年齢的に懸隔のある伊勢との関係を考える時、彼が時平の子息であるという事と、和歌・管絃にすぐれていたという事とが親近の理由であると思われる。彼の兄左大将保忠が伊勢から箏の伝授をうけたという伝えもあるが、「伊勢集」を通じて知られる範囲での敦忠と伊勢の交渉は、保忠の四十賀に敦忠の依頼により屏風歌を詠じている事（上掲屏風歌の表参照）と、敦忠の晩年の頃その山荘に招かれて中務と共に歌を詠んでいる事などである（上述）。

参議玄上妻と伊勢

参議藤原玄上は中納言藤原諸葛の男で、琵琶にすぐれた人であつたが、官は延喜十九年（九一九）六四歳で辛うじて参議刑部卿に達し、承平三年（九三三）七八歳をもつて薨じた。かの名器「玄上」は一説にこの玄上宰相が醍醐帝に献上したものであるという。^⑩

伊勢と玄上妻との交渉は「伊勢集」に、

はるかみの宰相の北の方の、前より渡り給ふとて、消息をのみ云ひ入れ給へりければ月の明き夜

になん、

雲井にて相語らはぬ月だにも我が宿過ぎて行く時はなし

とあつて、かなり親しい間柄のように思われる。「雲井にて相語らはぬ……」から推すと、かつて宮仕していた頃の知合いであつたのかもしれない。因みに玄上のむすめは醍醐天皇の皇子、東宮保明親王（御母は皇后穩子）の御息所であつたが、その薨去の後、権中納言敦忠に嫁した。^⑪

藤原朝忠と伊勢

朝忠は三条右大臣藤原定方の五男で、母は中納言藤原山蔭の女といわれる。延長二年（九二四）十五歳で昇殿し、侍従、藏人、兵衛佐等を経て承平五年（九三五）左近権少将となり、応和三年（九六三）には従三位中納言に至つた。康保三年（九六六）五七歳で薨じている。朝忠は伊勢よりもずつと年輩は若いが父の定方と共に三十六歌仙の中に数えられているほどの歌よみである。朝忠はまた笙・笛などにも長じており、権中納言敦忠ともまじわつている。「伊勢集」に

隣の桜の花を見て、

歌仙本伊勢集の詞書には「土御門中納言（朝忠の通称）

の家の隣に住む頃、その家の花の散るを見て云ひや
る」とある。

垣越しに 以下略、前掲20P同歌

返し、朝忠の少将

桜花植ゑて我のみ見んとかは隣ありきや人のするとて
とあつて、両者の家は垣根を隔てて隣り合せていた事が
知られる(前節参照)。これを朝忠の少将時代の事とする
と、承平五年(九三五)二月、朝忠廿六歳以降の事とな
る。

藤原雅正と伊勢

雅正は堤中納言藤原兼輔の一男である。上記朝忠の父
定方と雅正の父兼輔とは従兄弟同志であり、雅正と朝忠
とは同年輩である。「伊勢集」によれば彼女の家はこの
雅正の家にも隣接しておつたようである。すなわち、

九月八日隣より菊に綿俺ひにおこせたりける、朝
に堀りて遣るとて、

数知らず君が齢を延ばへつつ名だたる宿の露とならな
ん

返し雅正

露だにも名だたる宿の菊ならば花のあるじや幾世なる

らん

「後撰集秋下」贈答これに同じ

「あさただ」「まさただ」と音が通じるのでこれはいず
れかの誤りではないかとも思うが、雅正との贈答の方は
儀礼的であり、朝忠との方は親しみが感じられるような
ので一応区別しておく。雅正は歌人としての名は朝忠に
比してやや劣るようだが、父の堤中納言兼輔は延喜から
承平頃にかけての代表的な歌人の一人であり、その逸話
も多い(「大和物語」等)。伊勢が「名だたる宿……」と云
つたのは雅正自身よりも父の兼輔に対する心おきからで
あろう。

源宗子と伊勢

源宗子は三十六歌仙の一人で、光孝天皇の皇子は忠親
王の男である。寛平六年(八九四)源氏を賜わり従四位下
に叙された。承平三年(九三三)右京大夫となり、天慶二
年(九三九)卒した。「伊勢集」にみえる次の贈答は宗子
の右京大夫時代(九三三―九三九)のことであろう。

右京のかみ、撫子の多かるを見て、

我が袖にうつらばうつれ手もやまず摘みや入れ(に)
し撫子の花

「古今六帖」にも宗子の作とする

返し

濃きかぎりことは摘み入れて撫子にうつれる袖の色を

見せまし

宗子は歌人としての出発も伊勢とほぼ同じく、「皇太夫人班子女王歌合」にはじめてその名がみえる。紀貫之とも親交があり、「大和物語」には多くの逸話が伝えられている。^⑩

藤原季繩と伊勢

伊勢がかつて宇多院にお仕えしていた頃、京極院での桜花の宴に召され、池上に散る花を題に歌を詠んだ事がある。^⑪ その翌日伊勢は季繩と歌を詠みかわしている。

今日までと流れいでぬに水の上の花は昨日や散り果てにけん

返し、季繩

桜花ひとさかりなるものなれば流れて見えざるにやあるらん

季繩は左中弁藤原千乗の男で、従五位上右近少将に至り延喜十九年(九一九)三月に卒した。世には片野羽林と称され、鷹飼の名人であつたという。「大和物語^{百・百}」は彼に関する話を伝えているが、その女右近は女流歌人としてすぐれている。

在原としはると伊勢

在原のとしはるが亡くなりけるを聞きて

かけてだに我が身の上と思ひきや来ん年春の花を見じとは
「後撰集裏巻」これに同じ

「伊勢集」に見えるのは僅かこの一首であるが生前かなり親しかつた人のように思われる。としはる、(俊春か?)その人については明らかでないが業平の子息に棟梁、師尚、滋春らがあるところから推測して、滋春の兄弟もしくはその子息ではないかと思うが後考を俟ちたい。

最後に、第三類に属する人々は伊勢とほぼ同時代の女房達である。

一条と伊勢

一条は、清和天皇の皇子貞平親王の女でその出自は高く、当時の数少い女流の中では注目すべき歌人である。

「後撰集^{恋五}」に、

一条がもとに「いとなむ恋しき」といひにやりたりければ、鬼の形を書きてやるとて 一 条

恋しくばかげを見てだに慰めよ我がうちとけてしのぶ顔なり

かへし

伊 勢

影みればいと心ぞまどはるる近からぬけのうときなりけり

戯れに似たこの贈答を二人の間のものとすれば、かなり

うちとけた交友であるといえる。一条の宮仕先としては「大和物語」に内蔵人(十三段による)、京極御息所(三八段による)、陽成院(四七段による)などが伝えられているが、「拾遺集雑春」にも京極御息所に仕えた事が見えており、且伊勢とのつながりを考えると、宇多院の女御である京極御息所藤原褒子(時平女)に仕えたと思われるのがよいと思う。おそらくそれ以前宇多院の御代の頃に内の女蔵人であつたのであろう。いづれにしろ伊勢と親近の可能性は十分ある。

兵衛命婦と伊勢

四月一日、宮にて

いづくまで春はいぬらん暮れ果てて別れし程は夜になりにし

返し、兵衛命婦 (歌仙本は兵衛佐の命婦とする)

暮れ果てて春の別れの近ければいくら程も行かじとぞ思ふ

兵衛命婦に関しては「大和物語」一四七段に伊勢と共に女一宮均子内親王を囲んで処女塚おとめの物語の絵に題して歌を詠み合っている事が知られ、さらに一七〇段には式部卿宮敦慶親王家の別当藤原伊衡の病を見舞つて歌を詠んだ事がみえる。これらによると兵衛命婦は中宮温子、ま

たは敦慶親王家の女房である事が知られ、伊勢との間柄も了解される。詞書の「宮にて」は温子の宮か敦慶親王家か断定しかねるが、ともかく兵衛命婦も伊勢と同様の経路をとつて、中宮の崩後均子内親王そして敦慶親王家へと宮仕先を移したのではないかと考えられる。

中宮内侍、中宮宣旨、遠江内侍らと伊勢

これらはいずれも温子中宮の女房達と思われる。従つて伊勢にとつては兵衛命婦などと共にかつての同僚であつた事になる。「伊勢集」に、

故中宮の内侍のもとに

もしきの花の匂ひはくれ竹の世々にも似ずと聞くはまことか

返し

もしきに流るる水のながれてもかかる匂ひはあらじとぞ思ふ

とある。中宮の薨後しばらく里居していた伊勢の許から中宮内侍に、其後の宮の内の消息を尋ねたものであろう。中宮宣旨に関しては「後撰集歌中」に

人の許に尾花のいと高きを遣はしたりければ、返
事に忍草を加へて、
中宮宣旨

花薄穂に出ることもなき宿は昔しのぶの草をこそ見れ

かへし 伊勢

宿も狭に植ゑなめつつぞわれは見る招く尾花に人やと
まると 「伊勢集」 ほぼこれと同じ

という贈答がみられる。遠江内侍に関しては「伊勢集」に、「故中宮うせさせ給へる頃、遠江内侍経をおこせたる返し」として、中宮を悼む伊勢の長歌がみられる。

堀川院土佐と伊勢

堀川院に土佐とて候ひける人の、陸奥介経邦といふ人の妻に成りて下るに、

塩釜の浦漕ぎつらん舟の音の聞きしがごとくきくは悲しや

返し

塩釜の浦漕ぐ舟の音よりも君をうらみの声ぞまされる
堀川院は中宮温子の里方で、父の摂政藤原基経の第である。中宮は里第の堀川院に在られる事もあつたから（日本紀略）、堀川院の女房であつた土佐と相識る機会はある。伊勢との贈答はこの「伊勢集」にみられるものだけであるが、土佐自身の歌は「後撰集」に八首みえ、この期の女流としては注目すべき存在である。

順徳院の「八雲御抄^{六用}意部」に、ある時順徳院が「古今

集」の歌を御自分で左右に番わせられたところ、その夜の御夢に小野小町が現われて申すには「この古今の御歌合に、皆伊勢は左、我は右につがはれて侍る事、深き憂ひなり。」というのであつた。順徳院は驚かれてかの歌合の巻を開いて御覧になると、殊更になされたわけではないのに、なるほど小町の言うとおり、番い毎に伊勢は左、小町は右になつていた。そこで、院は今更のごとく「是を見るに且は恐れ、かつは随喜」せられたという。

この伝えは平安初期の二大女流歌人小町と伊勢が、その歌才の伯仲を唱えられつつもなお、小町の墨を摩す実績を伊勢が持つていた事を、裏がきするものではなからうか。勅撰集に入つた歌の数の多い事も、作家としての活動の長期にわたつた事も、伊勢の歌人としての実力が大きく、且つそれが高く評価されるべきものであつた事を示している。古来女流作家の晩年の落魄を伝えるものは多いが、伊勢にそのような伝えがないのは、彼女の終りが比較的静安であつたからでもあらうか。

伊勢の後世の文学に与えた影響、また、「伊勢物語」の作者としての当否など、まだ問題は尽きたわけではない。伊勢の文学的周辺は基た豊かであると云つてよい。

けれども今回は伊勢の伝記面の考察を主眼とし、その作品等についてはまた別の機会に筆をとりたい。

註

- ① 大谷学報第43巻第1号掲載拙稿「伊勢伝考——敦慶親王と伊勢——」参照。
- ② 「後撰集恋五」
- ③ 「拾遺集雜秋」および「中務集」参照。
- ④ 「大納言」は「中納言」の誤写かと思われる。「中」の字の草体は伝写間に「大」に誤られる事がある。敦忠は権中納言で終った人で、大納言の経歴はない。権中納言の事を単に中納言と言う例は多い。
- ⑤ 「摂陽群談^{十三寺院}」伊勢寺の条、および「羅山林先生文集^{四十三}」摂州伊勢寺碑銘参照。
- ⑥ この本文は現存の「伊勢集」のどの伝本にも見あたらない。一条兼良が何に拠ったかわからないが、もし「伊勢集」だとするとその部分は現存の諸本に脱落したものと考えなければならぬ。
- ⑦ 「袋草紙三」能因兼房車後ニ乗テ行之間、二条東洞院ニテ俄下テ数町步行。兼房驚問之。答云。伊勢御家跡也、彼御前裁結松于今侍。イカデカ乍乗可過哉云々。松木ノ末ノミルマデ不乗車云々。(統群書類従巻第四六〇)
- ⑧ 曾沢太吉氏「伊勢の御考」国語・国文昭和9・3号参照。
- ⑨ 「伊勢伝考——宮仕時代を中心に——」大谷学報第41巻4号および「伊勢伝考——敦慶親王と伊勢——」同、第43巻1号掲載拙稿参照。
- ⑩ 萩谷朴氏著「平中全譜」附録平中伝記参照。
- ⑪ 同氏「平中全譜」第三部論考参照。ただし「思ふより……」の歌は寛平七年以降、二人の交渉がとだえてしまつて後、再び皇子夭折の際(延喜四年頃)平中から贈られたものである。
- ⑫ 類従本「伊勢集」でいうこのほか三首(類従本歌順番号で一七・二・三一・五・三一九)が定文の歌と知られる。
- ⑬ この詞書の部分は類従本では甚しく乱れているのでしばらく西本願寺本によつた。なお「後撰集恋五」の詞書は、「親のまもりける女を、いなともせとも言ひはなてと申しければ、伊勢」とある。
- ⑭ 「袋草紙卷二」に「後撰集」の難点をあげて論じ「又業平元慶四年卒云々、(中略)凡業平会合伊勢事有疑。(中略)又タノメツツの歌は在古今集躬恒歌云々。」と述べている。
- ⑮ 大谷学報第43巻第1号掲載拙稿中の「秦爭相承血脈」参照。
- ⑯ 「禁秘抄上」「玄上」の条に、「累代宝物也、(中略)或云、玄象吞青鉢之水、所以号玄象、又玄上宰相、献延喜帝、仍号玄上、兩説也、但妙音院入道(師長)付玄上説、歟」と見え、「尊卑分脈南家真作卿流」三ノ二〇の玄上の系図の注記に、「玄上事、此器即付本人名字、日本靈宝也」とある。
- ⑰ 「大鏡上」師輔伝および「後撰集哀傷」参照。
- ⑱ 大日本史料承平三年二月十八日条兼輔薨去の記録のところに、「伊勢集」の「京極なる家にいきてそのわたりなる

人(兼輔)に、此里のしるべに君もいでこなん都のぼりにわれは来にけり」をあげて兼輔に送った歌としている。これを信ずれば伊勢は兼輔とも交渉があつた事になる。

⑱ 「紀貫之集」および「大和物語」三〇、三一、三二、三四、三九、五四、六三、八〇、一〇八各段参照。

⑳ 「伊勢集」に、「京極院に帝おはしまして宴せさせ給ひ、まゐれとあればまゐりて、池に花散りなんとする心を、年を経て花の鏡となる水はちりかかるをや曇るといふらむ」

㉑ 歌合における左の優位は、歌合以外の行事や競技における左方優位の社会的慣習に従つたもので、特に歌合では左一番を優位に考える不文律があつた。多くの場合左の一番の歌は匿名や女房名が用いられていても実際は上皇や天皇のごとき高貴な方であつたからでもある。従つて左の一番は大方勝と定められ、せいぜい持くらいいなつても負にする事は殆んどなかつた。この事は平安朝初期の歌合においてはまだそれほど形式化されてはいなかつたが、平安朝も後期から中世になると左の絶対優位性が故実化されるに至るのである。

大谷学報 第四十三卷 第三号予告

パーソンス理論における

類型変数の図式……………中 久郎

教行信証における

三一間答の特質……………白井元成

芥川竜之介における宗教(上)……………渡辺貞麿

陶冶の両極

—シュブランガーにおける陶冶理想の探究—

……………前田 博